

ホスピスに賭けた男

「函館おしま病院」

福德雅章院長に会いに行く

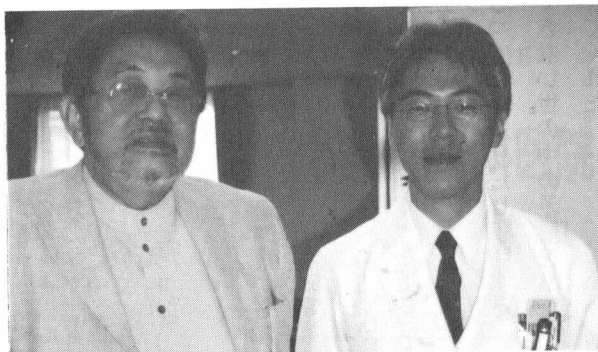
木下 順一

突然娘から電話が来た。函館おしま病院にホスピスの病棟が出来るそうだけれど、もっと早ければお母さんをそこへ移してゆつくりさせたかった。そこのお医者さまは、インタン時代、大変感動的な体験をなさった方なの。何かの記事で見たんだけど、たまたまガンの女性患者の担当になって……その末期のガン患者は、どうしても

幼稚園へ入った娘の弁当が作りたくて、器具のすべてをはずして、病室を抜け出し家へ帰り、娘の弁当を作った。そしてそのときはじめて母の幸福を味わった。でも、三日目には病院に連れ戻され、それから間もなく亡くなった。その若い母の姿を見て、インタンの福德医師は、家族の絆の強さ、尊さを感じて、いずれ自分はホスピス

を備えた病院を作ろうと決意したというの。お母さんを、そこに入れたかったわ。看護師さんは私と同じ北星大学の福祉科出身者なので、なお親近感を持ったの。

これが娘の突然の電話の内容だった。先日、私はホスピスにすべてを賭けた医



師、福德雅章先生を訪ね、病院を案内して貰った。住宅街に建つ、外観はことさら病院らしさを示していなかったが病棟も、壁にも、天窓から光がふりそそぐ廊下にも、温かい木を用いたアットホームな造りだ。

ナースステーションもオープンな設計にしたという。ホスピスの病室は全て個室である。あらためて、娘のことを思い出した。「お母さんをゆつくりさせたかった」そう、ここなら妻も残された時間をもっと濃密に過ごせたのではないか。

ホスピスという言葉で私が思い出すのは、フランスの作家メリメの短編小説「マテオ・ファルコーネ」である。

ある脱走者が「マギ」に逃げて来て保護を願った。マテオはここを人間が最後に辿りつく助けの場所として作った。彼は当然憲兵が探しに来てその脱走者の存在をあかさなかつた。知らない突つばねた。ところが幼い彼の一人息子が、憲兵隊員がほうびにやると言った時計欲しさに、脱走者の隠れ屋を教えた。脱走者は逮捕された。これを知った父マテオ・ファルコーネは一

人息子を射殺した。

末期のガン患者はこの脱走者と同じだ。その患者を救い守り、人間としての尊厳を保ちつつ死んでいって貰うためにホスピスがあるのだ。二代にしてそのことに目覚め、それを自分の医者としての理想とした目の前の医師の笑顔にひかれた。言葉使いが、優しい人柄を感じさせた。

私の尊敬している放射線のS医師は、ガンだけはガン科というのを作って、放射線の医師、外科医、内科医、精神科医、さらにそこに宗教家も加わって診る必要があるという。もちろん絶えず、家族のぬくもりがもつとも大事だという。しかし現状は、他の患者たちのいるところで、頼ずりも出せず、空しさの中で患者は息を引きとるといのである。

哲学者のジャン・ケブリッジは言う、死は悲しいが、いかに爽やかに送ることが出来るかは、その国の文化の高さによると。函館おしま病院院長の福德雅章医師は、その世界を目指して毎日患者に接しているのであった。



ホスピスのチームステーションは、外部との隔たりが何もない。



談話室の一面